

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	40 / 2019 / 40-49 (再編集版)
タイトル	座談会 村井三郎さんを語る
著者名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

座談会

村井三郎さんを語る

編集部

室谷(司会) 私たちが青森県で植物を調べたりするとき、真っ先に読まなければならない文献に青森博物研究会が出した「青森県博物総目録」があります。植物編は2巻になっていて1939年に双子葉植物、1941年に単子葉・球果・羊歯植物が完成しています。驚くことに2冊とも村井三郎さんが一人でまとめています。ここで“さん”付けで呼ばせていただきましたが、本来であれば“先生”とか“博士”としなければならないのですが、できるだけ話が堅苦しくならないようにと村井さんでいきたいと思います。

村井さんは岩手県盛岡出身ですが、弱冠30歳でこのような仕事を成し遂げています。さまざまな資料を見て年譜とか著作目録を作ってみました(本誌53~61ページ)。盛岡高等農林を終わって青森営林局(現・東北森林管理局、管轄区域:青森・岩手・宮城3県)に入りました。ここを拠点に膨大な仕事をされています。50歳で東北林木育種場長として盛岡に転任されています。青森・岩手・宮城の3県という広大な営林局管内をフィールドに調査・研究されたのは、青森時代が中心になりますね。

皆さんは村井さんを先輩として、あるいは直属の上司として仕事をされてきました。近代科学の手法による“青森県の植物の草分け”的存在の村井さんについて、科学者としての横顔もそうですが、お人柄とか人間性豊かなお話を是非ともたっぷり伺いたいと思います。

出合い

室谷 村井さんに関連した年譜や著作目録を用意しました。村井さんが営林局に入ったのは1930年ですね。

棟方 私の生まれる前ですね、私は1936年生まれ。

岩淵 1930年は私の生まれた年です、午年です。村井さんも午年です(1909年)。

棟方 村井さんは顔が長いから午年に合っているね(笑)。村井さん自身、自分は顔が長いとよく言っていました。

岩淵 確か盛岡の馬町に生まれています。シュナイダーですか、スキーマの名手がありますね(ハンネス・シュナイダー、1890~1955)、顔が長くて、あの人と同じような顔をしているとよく言われました。

出席	と き: 2011年1月19日	ところ: 青森市・花祥
岩淵 功	1949(昭和24)年、盛岡高等農林学校卒で青森営林局勤務。村井三郎の高等農林学校の後輩に当たる。(年譜参照)	
五十嵐正俊	1951(昭和26)年、青森営林局勤務、翌年林業試験場青森支場造林研究室害虫係で村井氏が造林研究室長。	
棟方 啓爾	1954(昭和29)年、青森営林局内真部営林署勤務、すぐ青森支場配転、村井氏のもとで植生の調査研究に当たる。	
室谷 洋司	やぶなべ会第10代で、五十嵐氏(第3代)、棟方氏(第6代)の後輩に当たる。	

室谷 年譜を見ると、1930年の21歳のとき盛岡高等農林学校林学科を卒業して青森営林局に入りました。それから1959年の50歳までずっと、30年近く青森営林局というか林業試験場青森支場を拠点に活躍しています。

棟方さんは上司として仕えたわけですね。著作目録を見ると村井さんとの共著で「アオモリトドマツ林の成長と植生型」(1956)とか「亜高山帯林の成長と植生型」(1958)などの論文が出てきます。

棟方 私が営林局に入ったのは昭和29(1954)年4月で内真部営林署配属でした。ところがすぐ7月に林業試験場(青森支場)の方に移されました。そこで村井さんに指導を受けながら仕事をしました。

五十嵐 私が営林局に入ったのは1951年です。1年間だけ営林局で事務屋の仕事をやってつぎの年からは村井さんがいる試験場の方に移るのです。

棟方 (年譜を見て)そうか、私はいま74歳(この座談会開催の2011年時点)だから、村井さんは同じ歳(年齢)で亡くなっているんですね。私はずいぶんお世話になりました。一番お世話になったかただと思います。

室谷 私は前に岩淵さんから聞いたことがあります。確か盛岡の高等農林時代でしょうか、夏油温泉の方に村井さんに行ったことがあるそうですね。

岩淵 そうそう、細井(幸兵衛)さんが営林局に新規採用されたときで、私は内定していましたが行政整理があった年というときで、採用がのぼされアルバイトでした。その時、夏油温泉の向こうにある牛形山に登ろうと、私が案内役でした。ところが牛形山の登り口を間違えてしまいました。

結局は、牛形山に上がってそして下りてきました。私はどうも申し訳ございませんと村井さんに謝りました。すると、君のおかげで見られないものを見たよ、というのです。何かというとヒメカイウがあったと言うのです。これは青森県では恐山にありますが、ミズバショウを小さくしたようなサトイモ科の植物



林業試験場青森支場のスタッフと。前列右から2人目が村井三郎氏。後列左端の背広姿が細井幸兵衛氏、4人目が五十嵐正俊氏、中央の腕を組んでいるのが棟方啓爾氏 (1959年4月3日、同支場前庭で)

で珍しいものです。岩手県では夏油の南、焼石岳の方の沼にあります。ところが、このあとヒメカイウを見ようと迷ったところに行こうとしてもそこに行けないのです。今度は迷わないものですから。(笑い)

細井さんとも話していますが、確かに細井さんは村井さんからそのときのメモを貰っています。それにヒメカイウも書いています。どうも村井さんは見間違いではないかと思ったりしていますが、村井さんがこれを見間違いはありますか。

室谷 それは大変、貴重な話しですね。それが最初の出会いであったとは……。

岩淵 “貴重な疑問”でもあり最初の出会いです。その前にも村井さんの話は良く聞いていました。学校の先生が言うのです。“君たちは全然植物を覚えなないね。村井君だとか三木君とかは……”。三木君とはメタセコイアで有名な三木茂博士、高等農林の林学卒です。”彼らは良く知っていたが君たちは全然ダメ”、というのです。僕らは野外実習のときに、山道のあの角(かど)を曲がったら逃げようと考えている。ところが、私は若くて度胸がないものですから、他の連中は逃げるのですが逃げ遅れてしまいます。すると先生は、今の連中は……、となります。

(私が)高等農林に入ったのは昭和22(1947)年で17、8歳のときでしょう。同期は戦争から帰ってきた人が多く年齢が10歳も上です。“あのなア、ヒノキとサワラがどこが違うか、そんな細かいことを言っていると大物になれないよ”と言われたものです。(笑い)

私が逃げ遅れていると、先生はいま逃げた連中はあとで後悔するよ、それに引き替え君らは優秀で真面目な学生だ、と言うものですから結局逃げられなくなってしまう(笑い)。逃げた連中は我々を“屠所(としよ)に引かれる狼のようだ”と言う。“屠所に引かれる羊のようだ”は良く聞きますが“狼”だそうです。(大笑い)

室谷 さすが当時のひと、言うことが違う、深みたっぷりですね。

学生時代、秀才、菅江真澄、ほか

岩淵 室谷さん、著作目録にある1931年に出した「岩手植物研究」というのがありますね。村井さんたちが会を作って最初に出したもので、当時を知る貴重なものです。このうちの何冊か現物もっています。そのうちに差し上げますから。

室谷 それ、スゴイですね。確かそれは資金難でやめることになって何冊も出ていないようですね。岩手県の植物研究史から言っても画期的なものだったと思います。村井さんがあの若さで研究会を作って出した研究雑誌。岩淵初郎さんと二人で発刊の辞を述べていますね。

岩淵 岩淵初郎さんですが、村井さんと同期で、その後、水沢商業(現岩手県立水沢商業高校)の先生になっています。今でいうユキツバキ、当時はサルイワツバキですね、それを見つけたかたです。水沢の猿岩というダムが出来たところで見つけ、植物分類の大家・本田正次さんと呼んだのです。それで新種と判定したことになります。

ちょっと横道にそれますが、江戸時代の有名な菅江真澄がああたりに居たとき、そのツバキのことを書いているのです。「かすむ駒形」(天明6、1786年)という日記にあります。“農民がツバキを採ってきて田圃に植えたのが、何々……”と出ています。これは蛇足ですが、その中にガンとかツルを捕まえるオトリ(囿)、模型ですね、それを作っておくとツルがそれに下りてくる。その胆沢平野でやって



岩淵 功

いるのを真澄が見ています。この方法を伝えたのは及川という侍ですが、その子孫が作ったオトリにはツルの仲間がよく下りてくる。ところが精巧な、実物と見紛うようないい形のツルを作ってもそれには下りて来ない、というのです。

私は思うのですが、自分で絵を描いていて古い図譜を見てドキッとすることがあります。絵はあまり上手ではないのですが核心を掴んだものがあります。恐らくツルから見て、及川の子孫が作ったオトリにはそれがあるということですね。

それから真澄に関連した話ですが、青森森林博物館に下北の滝の写真があつて、それを撮った瀬川さんというかたに話したことがあります。真澄が歩いて書いた日記の「牧の朝露」(寛政5、1793年)に、下風呂から易国間のあたりですが滝の近くを通るくだりがあります。そこに昔、クンロク(薫陸)という香を掘った穴があると言うのです。クンロクと言えば琥珀ですね、日本では久慈にしかありません。実際、何を掘った穴なのか瀬川さんに調べるように頼んでおきました。

室谷 真澄は謎の人物ですね。薬草の専門家だとか、あるいは山師ではないかとも言われますね。薬草の権威として前面に出てきますが……。行って見て聞いて、日記に書いていることが多様です。真澄を読んでいくと今の研究テーマがいっぱい出てきます。私は雪形研究からこれにのめり込んでしまいました。

岩淵 そうです。この前、西目屋に昔、キリタンポがあつたと言う話がありました、真澄が食べたを書いてあるからと。私、よく読んで見ました。実際は秋田の山子(獵師)なんですね。赤石川の上流にも西目屋にも秋田から山子が入ってきます。真澄たちが山小屋に泊まっていたら持ち主が帰ってきて、それが秋田出身の人なんです。西目屋ではなく、秋田の人からキリタンポをご馳走になったことになりま

す。

室谷 とにかく真澄は素晴らしい。青森県ではとにかく方々を歩きました。そして絵入りの日記を残しています。ただ残念なことに津軽藩は、真澄があまりにも熱心に県内グルグルと行動をしているものですからスパイ嫌疑とかで、結局追い出したことになっています。そのため、日記類はほとんど青森に残らず、手厚くかくまってくれた秋田藩に残され今では秋田県の重要文化財になっています。

岩淵 そのことですが、別の見方もあります。真澄と一緒に歩いた人が、採集した植物の標本を江戸の本草学の大家に送ったというのです。すると真澄が言った名前と別の鑑定結果が出てきた。これはおかしい……。このことも青森から出ていった原因ではないかと、最近、言われています。

もうひとつ、真澄という人は県内を回っては常に本国に帰る、帰ると、と言っていながら出ていけない。これはおかしいと疑われ日記など全部とられてしまった。たった一冊、浅草の古本屋から見つかったというのがありますね。

室谷 「外が濱奇勝」でしょう。佐藤薮さんという植物にも造詣が深いかたが東京で見つけました。佐藤さんは亀が岡の縄文土器コレクションで有名な青森の成田彦栄さんと懇意にしている、成田さんに差し上げたのか売ったのかハッキリしませんが、成田コレクションに加わって門外不出の宝物でした。その後、成田さんの長男が引き継ぐのですが、そのかたは数年前に亡くなって奥さんが県立郷土館に寄贈した事になっています。今度調べて見ます。

真澄日記の「すみかの山」では青森市周辺がいっぱい出てきますね。ただしこれは写本で、県内の好事家に真澄が見せて写させたものと言われますが、これも秋田県に残されています。さっきの「外が濱奇勝」は青森県の重文になってもおかしくないものです。

牧野富太郎のことなど

さっき「岩手植物研究」の話が出ましたが、昭和の初めの頃に、我が国の植物分類の神様というか牧野富太郎が青森に3回ほど来て、岩手とか秋田にも行っていますね。営林局の指導もやっています。営林局の研修のことは大山さんというかたが「青森林友」に書いていますね。八甲田山の蔦に泊まりながら周辺を歩いている。これが終わって下北の方に行きました。

岩淵 下北は恐山です。恐山にクマイチゴの非常に匂いのキツイのがあったそうです。そのイチゴですが恐山の何番の札所と番号まであったので、さっきの滝の写真家の瀬川さんにメモを送って、この場所に今でも生えているのか頼んでおきました。ことしあたりは見れるかもわかりません。

室谷 村井さんに戻ります。村井さんは高等農林にいたとき(在学中)、「岩手植物志」を書いてそれを学校の方で本にして出版してくれました。実物を見たことがあります。独り立ちした学者の手になるような立派なもので、よほどの秀才ということですね。

岩淵 営林局の採用試験(面接)のとき、早池峰山の高山植物を聞かれ、村井さんは“全部、知っています”と言ったそうです。試験官は“ハイ、そうですか、いいです”と言ったとか……。

室谷 先生の方が、ボロが出るということですね。学究肌であるし、後々のことを良く見ると順風満帆というか世渡りがうまい、という感じもするのですが。

岩淵 もともと、村井という一族は近江商人です。

棟方 村井さんは、学究肌というのとはちよつと違いますね。融通が利くとか、でないでしょうか。

岩淵 私は村井さんに義理を欠いているので、何とも言えないのです。私、(林業)試験場に行く話があつてそれを断ったのです。

室谷 村井さんが来いと言ったのですか？

岩淵 そう、行く話しになっていました。ところがそのとき、営林局で近代統計をやる人がいなくて、私が行けば局が困ると思ったのです。当時は近代統計がブームでした。モンローという高価な計算機があつて、タイガーというのはどこにでも沢山ありましたが、私のところではモンロー2台で仕事をしていました。当時で40万円もする計算機です。ときどき故障が起きると丸善に電話をします。すると向こうの専門家は電話で音を聞かせてくれという。それで、そのボタンを押して、とか言って、どうこうして直るのです。

室谷 確かに、(雑誌)「青森林友」をずっと見ていくと岩淵さんの統計学を駆使した論文がいっぱい出てきますね。

村井さんは高等農林を終わって営林局に来たのは21歳。それで仕事としてすぐ方々、青森から岩手・宮城などと管内を調査しました。シーズンオフなどには牧野さんところに同定などで出向いたのでしょうか。

岩淵 標本を送ったのでしょね。また牧野さんも岩手に来ていますし指導を仰いだのでしょ。八戸にも来ています。

そうそう、岩手に来たときのエピソードがあります。リクチュウナナカマドを見つけていますね。そのときの発見が面白いのです。農民が荷車に刈り込んだ草を積んできた。馬草ですね、その中に入っていたというのです。やっぱり我々とは見方が違いますね。



棟方啓爾

室谷 下北に行ったとき、“キノコ踊り”したとかを聞いていますが、まわりの人を笑わせるようなところもあったようですが。

岩淵 牧野さんは、ふけの湯で金精様の大きいのを作って湯に浮かべていたという話があります。旅に出ると色々やったようですね。私、前に書いたことがあります(「八甲田の変遷」1999年、青森市制100周年記念出版)、蕨に来たとき桂月の墓のそばにカツラを植えたんですね。探して見ましたがなかったですね。このことを色々聞きましたが、誰も知りませんでした。

室谷 それは惜しいですね。あれば観光名所ぐらいにはなっているのでしょうか。話が戻りますが、さっきの「岩手植物研究」ですが、牧野富太郎さんのサポートが相当あったということになりますね。創刊号の序文を見るとそうあります。岩手の博物学の大家・鳥羽源蔵さんも賛同して下さったとあり、推薦文も書いています。

そしてその後営林局での村井さんの仕事は、「岩手県基準帯植物目録」(1935)とか「宮城県植物目録」(1935)、「十和田湖・八甲田山の植物」(1935)などと、植物の分布や生態の仕事が進み、次々と出版されていきます。発行元は青森営林局で、これらは一般から見ると応用的というよりは基礎的な研究になりますね、当時の営林局の考え方というのはどうなりますか。

戦前戦後の国有林、そして拡大造林

岩淵 明治の終わりから昭和にかけて、国内では人工林オンリーでした。それは関東とか関西などの“馬の糞”のような貧相な国有林は売り払ってしまい、その代わりに東北地方の原野などの木の生えていないところに大造林をする、ということになります。たとえば岩手山の山麓には3600ヘクタールの大原野があり一帯に10年間で植えました。その植え方が適地というより山の上まで植えていったので、中には生長の良くないところもいっぱい出てきます。

そのころ、ドイツではそろそろ人工林はやめて天然林を育てていくという方向になっていました。ドイツの林学がそのようになり、日本はドイツを真似ていますから人工林から天然林と、そのために必要な森林生態学に手を付けたのです。ヒバで知られる松川恭佐さんなどが色々やりましたね。

ところがここに大きな盲点があったのです。ヨーロッパというのは氷河に何回も見舞われていますね。植生が単純そのものです。我々の先生が山に連れて行ったとき、“ここに雑草がある”と手を出したら叱られたものです。“大事な雑草だから手を触れるな!”というのです。その先生、高等農林の武藤(益蔵)先生ですが……。ドイツなどの単純な植生でのことを日本にもってきたってどうしようもないでしょう。日本は大変な多様な植生なのです。それでは植生を調べよう、天然施業だよ、という目論見から色々やりました。ところがこれはダメでした。松川さんの天然ヒバ林にしても、秋田の岩崎準次郎がやった秋田スギにしてもそうです。



五十嵐正俊

天然更新の彼の理論では太い木が3本あれば、その間には中位の木が、さらにそれらの間に小さい木が生えるという。ところが山というのは、どっこいそうはいきません。視察のために局長がくるといって、営林署のみんながカンテラをつけて夜通しで苗木を植え込みました。(失敗なのですが)うまくいっていると見せつけるためです。そういうことで天然更新というのをやりましたが、結局は何にもならなかったのです。(この時の結果として)残ったのが増川と大畑の実験林だけです。ほかの天然更新

は大失敗でした。日本のようなネマガリタケもあれば雑草がすぐ生えてくるところでは、規則通りの天然更新ができるわけがありません。

このようにして終戦になりました。伐る木がない、そこでそのとき財政を支えたのが何かというと失敗したはずの拡大造林でした。官行造林とか一斉造林だとか、それを伐って何とかしのいだということです。すぐ反動がきました。伐る木がなくなって将来伸びるであろう木をも伐って良いということになりました。そこでまた一斉造林が始まったのです。

私たちの仕事は、ちょうどその終わり頃に当たったのです。今ではまた先祖帰りのように天然更新に戻っていますね。林政というのは百年の計ですから大体、50年もたてば元に戻っていくということです。

五十嵐 帳簿上は造林して失敗したところを、天然更新ということに台帳を書き換えたこともあったようですね。

室谷 今だからいえることでしょうか、色々あったのですね。棟方さん、前に出た村井さんとの「亜高山帯林の成長と植生型」(1958)ですが、内容とか目的は何ですか。

棟方 それは岩淵さんが言った戦後の木を伐ってしまったあとの、拡大造林が一番、華やかなりし頃のことになります。村井さんは非常にタイミングよく仕事をしていました。拡大造林では指標植物というのが非常に大事になります。どこまで造林を上げられるか、それを林業試験場からの委託でやったのです。(海拔)1200メートル以上まで造林を上げられるかどうかをテーマでした。

岩淵 あれは結局、木を伐れということです。昭和35年の朝日新聞の論説を見れば分かりますが、“国有林は伐り惜しみを止めろ”とあります。いま思うと、パルプ業界は紙がなくて新聞社を動かして何とか国有林を伐らせようとしてました。そのうちにアラスカからパルプが入るようになって、途端に手のひらを返すように“国有林は乱伐だ”と、盛んに紙面を賑わしたものです。

棟方 あれは身勝手な話しですよ、国有林に対して……。

岩淵 私は、国有林を伐ったあとに植える係(造林課)だったものですから大変でした。岡野君という新入りと飲みながら話したことがあります。当時、夜に皆んなを集めて拡大造林のことを話します。ブナを伐ってスギやカラマツを植える立場、これが私です。会合が終わって岡野君と飲みながら、彼は“岩淵さん、こんなに木を伐って良いものですか!”とくる。私は、“芥川は「侏儒(しゅじゅ)の言葉」で、キリストは彼自身不善なものと知りながら、知的正義と戦うと書いてあるだろう。そして我々は私的正義のために戦い続けなければならない”と、煙に巻いて言い聞かせたものです。(笑い)

樹種更改試験がテーマ

棟方 村井さんはそういう意味では本当にタイミングが良かったですね。当時は樹種更改試験がメインテーマでやりました。ハッキリいうと造林は海拔のどこまで上げられるかということです。

岩淵 その実例は萱野茶屋の上の前岳を見れば分かりますよ。

棟方 何しろ20平方メートルくらいのところで材積を計る。これはシロウトでもおかしいと思いました。計るとものすごい材積になるでしょう。村井さん自身はどのようなことを考えてやっていたかは知るよしもありませんが。

五十嵐 私が入った頃は近代統計がはやったときです。上司の木村繁義さん、昆虫をやったかたですが統計学のテキストを出張先でも読んでいました。また昆虫の調査に行って、その夜には分散分析

ぐらいはやっつけてしまいます。

岩淵 河野一郎が農林大臣のときですが、とにかく伐れと、伐らないと皆クビになってしまいます。

棟方 初めに解答があってあとは合わせるだけです、そう私は思いました。中央から地方まで全部、圧力がかかっていたということです。

岩淵 だからそれに合わせて皆が解答を書かなければなりません。ただ村井さんは非科学的なことは言っていない。大畑の天然ヒバについて「林業技術」だったかに書いていますが、松川さんの方法はおかしいと書いています。(編者注:林業技術、236号、1961)

室谷 それ、大事ですね。村井さんが“ヒバの神さま”と言われた松川さんにクレームをつけたとは。

棟方 村井さんで印象に残っているのは、当時木の分布図を作っていました。調査では急行とか汽車で移動するのですが、汽車の窓から見渡していて、アレ!となります。私にメモ用紙を渡して記録していきます。さらにアレ、コレで一瞬のうちにとどの木がある、などと分かるのでこれはスゴイことです。

岩淵 それ、私の友達で九州の熊本から来た人がいました。鹿児島高等農林で初島住彦という先生がいましたね、そのお弟子さんです。初島先生と旅行をすると汽車の窓から見て、あそこに何があったから降りと言ったそうです。彼には何も分かりません、それで途中下車して……。



調査のひとつ、村井三郎氏と棟方啓爾氏(村井氏の隣)、福島県安座にて(1956年9月28日)

棟方 目というより頭なんですね。つくづく思いました。ただ見ているだけではない、やはり知識が目を鍛えています。それから分類が好きな人は絵も好きですね。その最たるひとが牧野富太郎。細井さんも、岩淵さんも絵がうまい。絵が描けるというのは区別できるからで楽しいと思います。

岩淵 牧野富太郎はネズミのヒゲで絵を描いたというのです。大雪山の植物図集で有名な小泉秀雄は、図鑑を描くとき頭から描いていったという話があります。普通は、図鑑などは全部を合わせて考えてから描きますが、そうではないのです。

棟方 ところで、村井さんは絵を描いたかな?見たことがないですね。これを言いたかったんです(大笑い)。それから、村井さんは人の悪口をいっさい言わないですね。これは大事なことです。

五十嵐 大体、成功している人間は世間にはまともな人間に見られませんでした。あそこにいる人は皆変わり者で、どこかおかしいと。試験場は変わり者でどこかおかしいような人でないと務まらないという面接官がいたほどです。

人柄とクセ

室谷 リーダーとしてチームを引っ張っていくには、ただモノを知っているとかが頭がきれるだけでは駄目ですね。やっぱり人柄というのが全体の仕事の善し悪しに関わっていきます。棟方さん、さっき村井さんの顔が長いとか、シュナイダーの顔に似ているとかがありましたが、写真などありませんか。

棟方 あります。安座(福島県)に調査に行ったときとか、馬ノ神山に北限のカラマツ調査で行ったときのもあったと思います。支場で全員が写したのもありますね。

五十嵐 確か、八幡平に行ったときの写真もあったのではないですか。

室谷 今度、ぜひ見せてください。それから村井さんは酒がお好きなかたですか？

棟方 酒は飲みません。ビールです。村井さんところに来た酒は細井さんが飲むことになります(笑い)。村井さんは飲むというより会合が好きなかただったんですね。とにかく笑って、高笑いして、そして最後に額をポンと叩くひとでした。(笑い)

和田干蔵さんとはポン友でした。毎週のように干蔵さんが支場の研究室に来ました。すると“干蔵さんが来た、干蔵さんが来た”と周りでは言っていました。私が入った頃は場長になっていたので場長室に入っていました。

室谷 支場はどこにあったんですか。

棟方 あの建造物として有名な旧営林局の建物がありますね。その東側のいまは駐車場になっているところです。後ろには土壌研究室が、東ヨコにはテニスコートがありました。2階には神潔さんがいる研究室で種子鑑定室がありました。神さんはここに籠城していたのです。とにかく家に帰らないのです。奥さんが俸給日になると給料を貰いにくるといった感じです。

岩淵 村井さんは、私の父が法量の担当区にいたときですが、御花部山のあたりでマムシに咬まれたという話があります。父から聞きました。近くの部落で柿の渋を貰ってそれを村井さんに飲ませたそうです。「十和田湖・八甲田山の植物」(1935)の本を書いたあたりのことだったと思います。柿の渋というのは非常に飲みにくいそうです。それがマムシの毒消しに効く。江戸時代でもへびにやられたら“柿のヒタをどうこうしなさい”と書いていますね。

いまそういうのをまとめて「津軽の博物誌」のようなものを書こうと思っていますが、私のワープロの印刷機能が故障してどうにもなりません。パソコンだと横に書いていくでしょう。これではなかなか気が進みません。昔のことを横に書いてもピンと来ないのです。

室谷 棟方さん、村井さんと調査に行ったとかの思い出がありますか。

棟方 それはね、私が一緒におったのは2年間でした。村井さんは細井さんとはほとんど歩かなかつたようです。全部わたしがサポートしたことになります。尾瀬に天然カラマツの調査にいきました。たった二人です。檜枝岐で大歓迎を受けて、これは秋田営林局から大先生が行くのでキチンと対応しなさいと指示があったのでしょね。ご馳走がいっぱい出て、村井さん酒はあまり飲まないで私が全部飲みました。

青森での最後の頃ですが、村井さんが言いました。“もうちょっと覚えないと!”(笑い)。いま考えればそれは最高のチャンスだったんですね。北限のカラマツにも連れていってくれました。カラマツを当時やっていたのです。

それから村井さんのエピソードですが、とにかく笑うと額を叩くんです。私と行ったときは便秘で悩んでいました。ウイスキーを飲んでピーナッツも必ず持って歩いていました。“棟方、ピーナッツ食えば便秘治るんだ”と言っていました。それから印象に残っているのはヒノキチオールのことです。ヒノキチオールは亀の甲の分子構造ですね。それ発毛促進になると言うのです。よく頭に塗っていました。



室谷洋司

岩淵 発毛というと利用課の小笠原という方が、みんなが言うには“俺はヒノキチオールを使わなかったからだ!”と言っていたと……。 (笑い)

棟方 村井さんは、木村武松さんには一目おいていましたね。大学を二つ終わったというかたで英語が達者でした。青森ヒバの説明の英訳は木村さんで、外国のかたにも褒められたという話があります。非常におとなしい人で朝起きると布団の上で聖書を読んでいたとか。一説にはマンガを読んでいたという話もありますが。(笑い)

青森から盛岡へ

室谷 青森を拠点に大変な業績を残して1959年からは盛岡に行きますね。岩手県人ということもありますが向こうでは多くの要職について、結局は膨大な標本とか重要文献類は1980年に開館した岩手県立博物館の中核になっています。その前の1973年に岩手県立博物館の展示内容を助言する専門委員になっています。標本などの博物館入りは、ひとつの筋書きになっていたのでしょうか。五十嵐さんは、岩手に行ってからも村井さんの近くで仕事をしていますね。

五十嵐 村井さんは、東北林木育種場長で行くことになったのです。

棟方 林試の青森支場がなくなった。それで新しく開設された育種場になった。あのとき私にも来いと強く勧められました。エライ目にあいました。それはただ勧められたというよりもコブがついていて、どうも奥さんの命令もあったような気がしています。

室谷 だいぶ奥さんにも可愛がられたんですね？ それで、村井さんは日本林学学会賞(1951年)を貰ったり、青森では東奥賞(第4回、1951年)を貰っていますね。これは青森を拠点にして世に出された業績が評価されたものです。そして盛岡に行くのですが岩手県では村井さんはいっぱい要職についています。ただ、青森には村井さんの業績を偲ぶものはほとんどありません。残念なことです。

五十嵐 村井さんの郷里は盛岡ですからね。

棟方 村井さんは幸せな人ですね。好き勝手なことができました。研究のための予算はいくらでもついていた。

岩淵 私たちが担当していた頃は、普通の予算会議はいかに削減するかがテーマでした。ところが村井さんの場合はそうではなかったですね。

五十嵐 青森支場ができて初めは営林局の経営部長が支場長を兼ねていて、やがて村井さんがなりました。それまでも長は傀儡(かいらい)で、村井さんがずっと実権をもっていたということです。

岩淵 当時、予算折衝するときは10のものは10ではかえってこないから増やして出しますね。デタラメな書類を作ることになりませんが、それがいかに面倒なことか。人間、正直なものですから同じような数字がつながったりして困ってしまいます。そのうちに智恵のあるものは乱数機というものを使って、これで最後の数字を締めくくるといって、いわば科学的なやりかたをしました。あるとき要求通りに予算がついて困ったことがありました。(笑い)

室谷 村井さんが成した膨大なお仕事、そして成果はそのような時代に裏打ちされていた、良き時代だったということでしょうか。村井さんに直接かかわりあった方々のお話は貴重そのものです。酒が進んで脱線しそうになりました。この辺で終わりとしましょう。ありがとうございました。

(文責 室谷 洋司)